

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1747号 2004年09月13日(月)

《 from unit to individual 》

今年に入ってだけで中国に来るのは3回目ですが、今回の北京については実に10数年ぶりです。そして久しぶりに天安門広場に立ち、同門に相変わらず掲げられている毛沢東の写真を見ながら考えたことは、「この写真が外れるのは、いつになるのだろうか」という点です。むろんこれは修辞で、問題意識は中国における共産党一党独裁の終焉の日は何時になるか、という点。

北京の知り合い何人かにこの問題をぶつけました。皆笑うだけで、「さあ」で終わってしまふ。想像が出来ない、というのです。いや想像が出来ないだけでなく、世界のために、そして日本のために、さらには中国自身のために良いことなのか悪いことなのかも分からない。この意見には私も賛成です。なぜなら、それはこの巨大な13億を超える民を抱える国が少なくとも一時期は不安定化の状況の中をくぐることになるからです。

しかしでは今の中国がそのまま20年後もあるか、といったら確信はない。ごく最近でも中国での変化を強く感じている人が北京には数多くいました。例えば旧知の間柄で、今回で北京を含めて中国駐在が三回目という時事通信の村山支局長は、最近の中国で一番の驚きであり、しかも中国の指導部に深刻な危機意識をもたらしたのは、例の日本と中国が覇を争ったサッカー場での反日運動だった、というのです。この騒動の全貌は日本にも伝わっていないし、ましてや中国ではそのごく一部でさえも伝えられていない。

何が中国の指導部にとってショックだったのか。それはああいう反日の動きが出たことではなく、それを必要に応じて抑えられなかったことだというのです。以前だったら、指導部が抑えようとしたら抑えることが出来た。中国の共産党支配は国营企業、農村社会など各单位を党ががっしり抑えて、その政治意識を押しつけていく、浸透させていくというプロセスだった。それが今まではワークした。天安門事件のような武力を使って抑え付けた事件もありましたが、あれは例外で、中国は今までは民衆感情の爆発をいままでは抑制してきた。

しかし今回の事件は違った。重慶のサッカー場での日本チームへの中国民衆の仕打ちは、対戦相手が中国でなかったにもかかわらず、モノがピッチに次々と投げ込まれる酷いものだったらしい。あまりにもひどく、そのまま北京の工人体育サッカー場に持ち込まれれば国際的非難を浴びそうだった。で、中国の指導部は北京では日中の決勝戦は整然と行おうとしたし、一部の指導者はそれを日本に約束した。にもかかわらずそれが出来なかった。

中国民衆は、日本公使の車までボコボコにした。これにはさすがの中国も、日本に謝罪せざるを得なかった。それが中国の指導部にはショックだったというのです。民衆に対する自らの指導力、そしてコントロールする力の著しい低下。

あのときサッカー場に居て、実際に場内の雰囲気を見ていたと言う友人を持つ住友信託北京事務所の甲斐さんの話を伝聞で聞きましたが、日本の伝えられているような「一部が跳ね上がり、全体を先導した」といった類のものではなく、君が代の段階からサッカー場全体が異様な雰囲気、とても「一部の人間の」と言えるような状況ではなかった、というのです。つまりそれは中国民衆の激しい反日感情の横溢が顕著に表れた事件だったらしい。

中国側の観客席にいた日本人は、あまりの恐ろしさに意に反して中国側のチャンスの時にはそれに併せて手をたたいた。そうしなければ危なかったという。

なぜサッカー場に集った中国民衆には中国指導部の意向が反映しなかったのか。直前まで北京のサッカー場に来て試合を見る予定だった曾慶紅・国家副主席が来なかったのは、「とても望むような試合会場の雰囲気には出来そうもない」と事前判断した指導部が、「リスクを避けた措置」だったと思われる。国家副主席が来ているのにあの荒れようでは、中国の指導部の権威が問われるし、それを許したとなれば対日関係上だけでなく、中国指導部の統治能力への疑念に繋がる。逆に言えば、最初から「抑えられそうもなかった」「抑えられないと分かっていた」ということです。

ではなぜそんなことになったのか。キーワードは「単位から個」です。この言葉を使ったのは村山支局長です。ポイントは、中国において支配プロセスの中で重要な役割を果たした「単位」が崩壊して、今や若者を中心に「個の時代」に入りつつある、そこではしばしば政府のコントロールが効かない、という点です。「個」は、日本と同じように独立した行動意識を持つ。持つが、例えば夜中のチャットなどでインターネットを通じて感情を相互に高ぶらせている可能性が高い。彼らは政府の号令より、ネットの共有感情を大切に生活している。

「単位」というのは、中国では例えば国営企業とか集団農場などの組織を指します。中国政府はそれらを支配単位にして、支配のピラミッドを形成してきた。むろん毛沢東の紅衛兵運動など思想運動もあったが、日常的には「単位」支配で民衆をコントロールしてきた。その「単位」を通じた支配が、効かなくなっている。例えば国営企業は行き詰まり、大量のレイオフが発生している。また、農村社会の共同体意識は崩れ、大量の農民が都市に出稼ぎに出る一方、農村社会でも利益優先の考え方が支配的になった。中国も「単位」が中心ではなく、「個」が前面に出てきている。

その「個」が「砂」のように希薄な関係で集合し、しかし時として大衆として集う社会を作り上げている。それを権威である方向に動かそうとするのは難しい、ということです。先進国では当たり前で、中国もやっとそうやってきたと言えるが、コントロールは難しい。

「個」は分散しているが、夜中のインターネットでの通信やチャットの中でいくつかの固まりを作って、感情を爆発させる。

最後には国民をコントロールできる、と今まで思っていた中国指導部にはショックだ。しかも「かなり強いショックを受けている筈だ」という人が多かった。整然と開きたい2008年のオリンピックは、もう目と鼻の先だ。

北京市内を走るとすさまじい建設ラッシュで、選手村の建設、施設の建設はもう始まっている。アテネのように直前まで施設建設が続けられる、という状況は北京では起きない。しかし、今度は「国民がどう動くか分からない」状況に直面している。具体的には日本や台湾が登場する試合がどういう展開を見せるのか。

中国は「単位から個」への大きな変化の中で、今までとは異なった政治状況に直面しつつある。そしてそれは、少し先の中国の政治意識を思わぬ方向に向かわせるかもしれない。その先に、「毛沢東の写真のない天安門」を考えたと言ったが、それは私の勝手な想像とは言えないだろう。

《 China = born in the war against Japan 》

外からは見えないが、中国の指導部が見直し始めたであろうと思われるのが、愛国教育の中身だ。北京の街を歩いていると、今でも国民が優先すべき事項を指示した立て看板があって、そこには第一に「愛国」がうたわれている。漢字が読める日本人の私には分かる。

今の中国の体制下において、「愛国」とは何か。これは日本人がよく認識しなければならないと思ったのだが、中国共産党の結党から発展、そして蒋介石を追い出して戦争を遂行し、そして政権を取るまでのプロセスは、「対日戦争、対日愛国運動」と表裏一体だ、という点です。つまり、中国共産党の権力への道は、反日戦争、反日思想教育の歴史そのものなのです。

江沢民が90年代に盛んに行ったと言われる「愛国=反日」教育についても、何人もの人から「もともとあったもの。それを江沢民は強化しただけ」と聞いた。考えてみればそうです。中国共産党の歴史は、「反日闘争」そのものなのです。彼らは、今回のサッカー場での民衆の動きを見て、「やりすぎた」とは思っているかもしれない。だから、少し修正しよう。しかし、やり過ぎをどう修正するかは大きな問題だし、反日に繋がりやすいからと言って愛国教育を止めるわけにもいかない。

なぜか。登場する次のキーワードは「革命後50年」「政権の正当性」です。中華人民共和国の成立は1949年10月01日ですから、今は既に55年がたとうとしている。革命後50年たって、実際の革命運動での英雄的役割を認められた人々は政界を去りつつある。英雄としてたたえられた毛沢東、周恩来、鄧小平らは、革命運動での戦果や統治で「政治家としての正当性」を与えられていた。しかし、胡錦濤もそうですが、今の指導部にはトップになるまでの強い実績はない。一世代前の、そして鄧小平のお墨付きをもらった江沢民でも、自らの統治の正当性を裏打ちするために90年代に国をまとめる愛国教育をし

た。その愛国感情が、中国のネットを覆っている。

村山支局長は、「日本で言えば今の中国は、日本の維新後50年くらいの明治から大正への時期に当たる」との見方をする。指導部も代わり、革命（明治維新も一種の革命です）の理念は薄れ、社会の流動化が進む。日本の大正時代がそうでした。まさに今の中国は、サッカー場での出来事を見ればそうなっている。指導部の意志が民衆に伝わらない、というよりも民衆から無視される時代に入っている。

中国の指導部には、他の多くの国の指導部がそうであるような「選挙で選ばれた」というような正当性は存在しない。胡錦濤だってなぜ彼が江沢民の後任になったのか自ら説明できない。今はニューヨーク・タイムズの報道をきっかけに、今回の全人代では江沢民が辞める、辞めないの話になっているが、それにしても中国の指導部は自らの権力者としての正当性の担保に苦慮している。彼らはまた、ほっておけば「砂」と化しかねない民衆をなんとか政治にとって粘着力の残るものとするためにも「愛国教育」が必要だ。しかし、その愛国教育はどうしても「反日」と表裏一体になっている。

正当性がない政権が正当性を主張しようとしたら、「その政権でうまくいっている」という証、国民に対する説得材料がほしい。中国の場合それは「経済発展だ」と多くの人が見る。有人衛星を打ち上げるのも入るかもしれないが、日常的に「この指導部で良い」と思ってもらうためには「国民を豊かにする」ことしかない。それが出来れば、国内は治まる。ということは、今後の中国の指導部は、今まで以上に「成果」にこだわるだろう、ということだ。

経済の話に移る前にもう一度確認しておく、「中国共産党の歴史は、抗日運動、対日戦争の歴史そのものであり、中国の愛国は直ちに反日に繋がる要素・様相を色濃く持っている」ということである。これは生半可なことでは消えそうもない、日本人が心しておくべき事実だと言える。

《 might be a rate increase 》

革命での実績という「政権の正当性」を失った中国指導部が、「政権の政治の成果」として国民に提示できる最大のものは経済発展だ。しかしこれも不安定。問題の一つは、中央の統制が必ずしも地方に対して効かない、という事実だ。「個」化した民衆に対しても中央政府のコントロール力は弱くなっているが、地方政府に対しても弱くなっている、というのである。なぜなら、地方も豊かになることを急いでいる。だから隣の省が製鉄所を作れば我もということになる。それを足し合わせると、国としては過剰投資になる。が、地方はこれを中央政府に隠れてもやろうとする。

今年の春先から、マクロ経済政策で一生懸命それを抑えてきた。しかし、どうやらまたぞろそうした動きが出てきている。投資は8月に再び息を吹き返してきたと言う見方がある。8月の中国の鋳工業生産は対前年同月比15.9%も増えた。「マクロ経済政策の抑制効果は、影が薄くなりつつある」(China Daily)というわけだ。加えて物価が上がってき

た。食料品がかなり上がっているらしい。石油も世界的に高い。

であるが故に、この週末北京で過ごしながら、一部の人が聞いた情報は、「国慶節（10月01日）の最中に利上げがある」というものだ。信憑性があるかどうか知らない。しかし、「8月の物価統計を見て」と中央銀行の周総裁は言っているらしい。その重要な物価統計は、この明けの13日に発表される予定とも聞いた。経済発展の不均衡に対する国民の強い不満を知っている中国の指導部は、物価の動きに極めて敏感だと言われる。投資が再び息を吹き返し、消費者物価が5%台という物価が上がり始めた状況は、彼らにとって極めて難しい決断を迫られる状況だ。

もちろん経済の弱い部分にも大きな打撃になる利上げ策は、かならずしも中国にとって選択できるベストの政策ではない。しかし選別的な裁量的な引き締め策（特定業種に限った融資抑制策指示など）がワークしないとすると、中国の金融当局は別の、つまり一般金利の引き上げという選択肢を検討せざるを得ない。

産業面でも中国は変わりつつある。それは月によって違うが、去年はあれほど黒字を誇った対外収支が、貿易収支などを見ると月次単位では赤字になる月が出てきている。国内での労働賃金の上昇が言われている中で、輸入の方が輸出の伸びを上回る状況が生まれつつある。こうした中で、製品ごとに強い対中輸出競争力を持つ日本は、全体でも対中貿易の黒字を計上し始めており、これは当然の動きとも言えよう。一方は赤字で一方は黒字。

しかし、中国に世界で一番クレームをつけ、隙あらば人民元の切り上げを狙うアメリカは、引き続き対中大幅赤字のままだ。月ごとに中国の対外収支は赤字になるというのに。例えば、先週発表されたアメリカの貿易統計を見ると、中国との7月の貿易赤字はまたまた史上最高を更新して149億ドルとなった。これは6月の142億ドルを上回る。アメリカの対中輸出は産業用機械などを中心に落ち込んだが、一方でアメリカはおもちゃ、ゲーム、コンピューター、その他家庭用品などの中国からの輸入を増やした。

アメリカからは相も変わらず「アメリカの貿易赤字の根本は中国の通貨政策。中国当局は引き続き人民元を売り、アメリカのドルを市場介入で買い、そのドルを退蔵している。中国がため込むドルは年間1500億ドルで、これは中国のGDPの約10%に相当するが、これは中国にとっては国内雇用の維持になり、一方アメリカにとっては製造業雇用の破壊となっている」(メリーランド大学の経済学教授である Peter Morici 氏)という非難が聞こえる。

もっとも月次ベースでしばしば赤になる中国の貿易収支と、既に大きな黒を出すに至った我が国の対中貿易を見ると、未だに赤字で中国に対して人民元の切り上げ圧力をかけ続けるアメリカという国は、「自分の国の産業構造の歪みを中国にぶつけているだけではないのか」という気がしないでもない。この問題はいつか取り上げる。

しかし歪んでいるのは中国経済もそうだし、ましてや日中関係は激しい歪みの中にある。

中国経済の歪みと言え、人手不足まで顕在化した沿岸部と内陸部の経済格差、都市と農村の格差、都市でも農村でも顕在化してきた貧富の格差拡大、中央と地方の権力分配の変化などなど挙げればきりが無い。

日中関係も歪みの構造の中にある。大量に入り込み、深まる日中の経済関係。しかしその一方で、政治的には危険に広まる中国での反日感情。北京にいる日本人だれもが、あのサッカー場での騒動を話しに持ち出すと、やや暗い顔になった。なぜなら、中国に暮らすに日本人として、「身の危険」にいつか直面する問題なのかもしれないのだから。ある中国駐在は、「日本人学校に通う二人の子供の通学経路」にも気を遣うし、「実際に変な人もいるので怖い」と述べていた。

村山支局長が別れ際に、「これからも、この国はこれはなんだというような驚くことがいっぱい中国では起きますよ」と一言。記者としては「それが面白い」ということでしょう。その通りだと思う。中国で進む民衆の「個」化と、豊かさを渴望する民。政治の安定はどう担保されるのか、そして国民意識の形成が反日感情と表裏一体で育った経緯を日本人としてどう乗り越えるのか。

関係改善の一つのポイントは、日本が中国にエネルギー効率の向上と環境問題の解決で協力すること。政府間の関係の改善はその大前提だ。この問題についてはまたまとまった文章を書きたい。

《 OPEC meeting with Russian delegate 》

今週は予定の多い週です。引き続き原油相場には注目、今週は石油輸出国機構(OPEC)総会が15日に開かれる。価格引き上げを主張する産油国が出てくる見通しで、例えばベネズエラは最近の原油価格高騰を反映して、2003年3月に導入された1バレル=22~28ドルの価格帯を28~35ドルへ引き上げるよう主張している。

一方、イランは30~35ドルへの引き上げを要求。これに対して、サウジは価格帯維持を支持していると言われる。ロシアの副エネルギー相がオブザーバーとして出席するのも注目される。このOPEC総会を受けて、先週バレル40ドル台前半でかなり大きく動いた原油相場が、今週はどう展開するかが一つのポイント。株や債券市場の関心は高い。

統計としては、アメリカの8月の小売売上高、鉱工業生産、消費者物価などに注目する必要がある。

今週の主な予定は以下の通り。

9月13日(月)

民主党代表選投開票

米8月財政収支

IAEA定例理事会(～16日、ウィーン)

9月14日(火)

7月鉱工業生産・設備稼働率(改定値)

米第2四半期経常収支

9月15日(水)	米8月小売売上高 黄・元北朝鮮労働党書記来日(～17日、衆議院外務委員会が参考人招致) 米9月NY連銀製造業景気指数 米7月企業在庫 米8月鉱工業生産・設備稼働率 OPEC総会
9月16日(木)	7月景気動向指数(改定値) 米8月消費者物価 米9月フィラデルフィア連銀指数 8月北米半導体製造装置BBI ECB理事会
9月17日(金)	8月日本半導体製造装置統計 小泉総理、メキシコ訪問 米9月ミシガン大学消費者信頼感指数(速報)

《 have a nice week 》

久しぶりに北京に来ていて、今日のレポートは北京からです。確か最初に北京に来たのは天安門事件(89年の6月だったと思った)の直後で、天安門を歩いていた時、友人が「ここから軍隊が出てきた」と聞いた記憶がある。その当時は王府井も片道一車線の細い通りで、今回行ったら非常に広がっていて、しかも土日は歩行者天国になっていた。素晴らしい街並みで、かなりびっくりしました。10数年ぶりの北京の第一印象は、

1. ビルの装飾、ネオンサインなどでカラフルになった
2. 夜も大勢の人が街に出ていて賑やか
3. 痩身しかないと思っていた中国人が、ちょっと太めになった
4. どこに行っても建設ラッシュ
5. 首都の貫禄のようなものが出てきた

などでしょうか。

北京の新しい夜の街にも行きました。「三里屯」というのです。日本のテレビにもよく登場する中国外交部(外務省)からそれほど遠くない、大使館など各国公館も多い地区に出来た「バー街」で、私が行った土曜日には凄く大勢の人が繰り出していました。街には活気がある。ここは首都・北京というよりは、上海という雰囲気でした。

三里屯は各店のお客を見ても欧米人が多い。道の横にオープンカフェ方式のテーブルが出ていて、なかなか良い雰囲気です。そのうちの一軒である「Lily」という店に入った。ナ

マ演奏をしていたので、それを聞きに。女の子三人組が音楽に合わせて歌っていた。しかし客は聞くでもなく、大部分は自分たちのゲームに興じながらハイネケンを飲み、その飲み終えたハイネケンを何本飲んだと誇示するようにテーブルに並べておくという雰囲気。

今週木曜日の朝まで北京に滞在する予定。皆様には、良い一週間をお過ごしください。

《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤 (E-mail ycaster@gol.com) が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます》